

## 第 1 回世田谷区総合教育会議

日：平成28年7月22日（金）

場所：世田谷区民会館ホール

午後 2 時50分開会

○司会 お待たせいたしました。それでは、第 2 部の世田谷区総合教育会議を開催いたします。保坂区長、よろしく願いいたします。

(スクリーン使用)

○保坂区長 これからの 1 時間は、総合教育会議でいきたいと思います。といたしても、今、1 時から続いていた教育推進会議の議論をしっかり引き継いで、基調講演の浅田審議官のお話、そして、特に点検・評価の工藤先生、小松先生のお話も踏まえて進めていきたいと思います。

総合教育会議の論点に入る前に、1 部の浅田審議官からのお話を聞きながら、特に現状と課題のところたくさんヒントになるお話をいただいたかと思います。20年後、30年後の日本社会はどうなっているだろうかという、確かに20年前の日本というのは、インターネットがようやく普及をし始めたという時代で、20年後のきょうは、ポケモンGOが本日10時をもって日本でもダウンロードが始まったと。今ごろ誰か転んでけがをしていないといいなと思いますけれども、そういうことであります。

ペーパーテスト中心の学力というものは、やはりどこかで転換しなければいけないんじゃないかということは1990年代、20年前にも言われていました。ただ、その1990年代後半、1996年ぐらいのときには、いわゆる高度経済成長期のストックがまだありまして、実は日本の勤労者の平均所得がピークになるのが1999年ぐらいですから、まだ伸びていたという時代です。ですから、ペーパーテスト中心の学力というのは転換したほうがいいんだけど、現実には、企業の採用も、人生のある種の見通しも、これは確実な尺度だよねということが、今と比べるとかなり強かったと思います。現在もまだ強いと思いますけれども、それだけで大丈夫なのかということが、例えば小学生や、もう少し小さいお子さんを持つ親たちと話すときに出てくるかと思います。

例えば答えのない課題にアプローチしていく力、実は世田谷区で外遊びシンポジウムを先週開催したところ、たくさんの方が集まってきました。実は子どもたちの多忙化というものもございまして、子どもたちは忙しくて、外遊びをこの指とまれでも誰も仲間がないということで、外遊びは絶滅危惧種になってきていますが、世田谷区ではプレーパークなどがあって、泥だらけになりながらターザンごっこをしたり、滑り台をおりたり、ツリーハウスをつくったり、これは、答えのないことに対して多方面からアプローチし、失敗しながら、諦めながら、でもこれはもっとやってみようという内面的な成長を非常に

促し、その後の資産になっていく、それが遊びの中にあるよねという話を先週していました。ですから、やはりこれからの子どもたちに、すぐに答えが出なくても、いろんなところからアプローチしてみよう、そして、そのアプローチで得たものをしっかりみずからに実をつけながら解決の道を開いていく力というのは重要なんだと思いました。

また、分野横断的な幅広い知識なんですけど、私流に解釈すれば、幾つもの異なるテーマあるいは課題が、人生でも、あるいは組織でも企業でも降ってくるわけです。それが全部ひっかかるように、このあたりかなということでも横串を刺して束ねてみる。そして、横串の中でスパークしてでき上がってくる新しい視点を、一見ばらばらに見える課題を整理し、順序よく解決していく力にしていくということで、これは世田谷区役所でもマッチングということで縦割りから横つなぎへとやっていることそのものなんですけど、やっぱり直感力であるとか総合力というのがとても大事だなと思いました。そういうことがないと、例えば第一線での技術開発あるいは発明、また芸術的なすばらしい表現などにつながっていかないんだろうと思いました。

また、実は総合教育会議でもたびたび話題にしてきたんですが、自己肯定感、自己有用感の低さ。学力の水準は高いんだけど、どうせ僕なんて、私なんてという自己卑下というのが小中学生のころからかなりあって、むしろそれは高校生、大学生へと広がっていく傾向で、どうしてこれだけ国際的に学力が高い小中学生が、大学レベルになると決して高いとは言えない存在になってしまうのかといった課題もいただいたかと思います。

そして昨年、総合教育会議の1回目は、教育ビジョンを施策の大綱にしていこうと決めまして、多様な学び、教育の実現、教員支援のあり方について、共に考える学校支援、幼児教育の充実に向けて、特別支援教育の今後について、とりわけ、この一番上のほうは、今、浅田審議官から投げかけていただいたこととかなり絡みますし、教員支援と学校支援は2つとも支援ですが、ちょっと違うんです。学校支援は学校を丸ごと地域の力で支援するという意味もあります。そして教員支援は、冒頭お話ししたように、学級経営が難しい状態になったときに、お任せしているだけでは難しいという現状が、世田谷区のそれぞれの学校のある場面で多分出てきているかと思っています。まずこれは校長先生を中心に解決するというのが今の仕組みですけども、それでも難しい場合もあります。この時代の学校現場で起きてくる困難さというのは、20年前の困難さとはまた全然違う要素があるだろうということで、いわば現場の教員自身を支援していく仕組み、そして学校全体を応援していく仕組みの中に、さまざまな教育技術やベテランの先生、教育学者、そういう人たちの

すぐれた方法論、チーム力を入れていったらどうだろうか。

教育委員会と一緒にオランダの教育現場を見せていただきました。オランダの教育現場では比較的自由に学校経営が任されているんですが、やはり問題が生じてくると、スペシヤルチームがその学校に入っていきながら底上げをしていく。これは非常にすぐれた制度だなと感じたところであります。

本日は、2点に絞ってこの議論を発展させていきたいと思えます。1点目の議論は学校支援です。「多忙な学校現場に対し、どのような支援が必要か」。論点の2は、「幼児教育において、何が必要か」について考えてみたいと思えます。つまり、教育とは何か、人の育ち、成長、試行錯誤、あるいは非認知能力と言われる総合的な力に、やがて発展する子どもたちの可能性をどうやって伸ばしていくのか。

論点1に戻していただいて、学校で先生が能力を十分に発揮するためには、どういう視点で支援を進めればいいのか。これは、教員支援にかかわるポイントであります。2番目は、地域の多才な人材が、どのように学校運営に参加・協力し、学校を支えていただくのか。地域参加、地域とのつながりというところでの論点です。

それでは、まずは教育委員の皆さんを指名して、それぞれお話しいただきたいと思えます。榊原委員から、榊原委員が大学で教えてきた立場、元中学校の校長先生と、現場ですっと長い経歴がございます。論点1についてお願いします。

○榊原委員 榊原でございます。よろしくお願ひいたします。

論点1の学校現場がとても忙しい。忙しいという声をお聞きになった方はたくさんいらっしゃると思えます。実は正式な調査というのはしばらくなされていなくて、平成18年度に文部科学省が教員の状況の調査をいたしました。それから、OECDでも国際教員指導環境調査ということで同様な調査もありますが、文部科学省が教員に対して行った実態調査を昭和41年のものとの比較で見ると、やはり当時の残業時間、いわゆるオーバーワークの部分が、平成18年度は大変ふえていることがはっきりしてきたというところがございます。

では、実際に、日常的に先生が行っている仕事の中の何がそんなにふえたのかということだと思いますが、これは、教員の業務の中のさまざまな領域と言ってしまえばそうですが、学習指導という、授業をする時間そのものがふえたということはそれ程ではないのです。1つは、やはりとても際立ってふえたのが生徒指導。この生徒指導というのも、要するに、質的な変化に伴う量の変化と見るべきかなと私は考えます。学校に入ってくるまで

の子どもの育ちが昭和41年当時とはかなり違っております。先ほどの浅田審議官のお話の中にもありましたように、本当に直接体験をしていない子どもたちがたくさんいます。知っているといってもバーチャルで知っているというような子どものほうが圧倒的にふえている。そして、何よりもスマホとかインターネットを使う生活が生まれたときから当たり前になって、ゲームで遊んで育ってきた現在の子どもたちというのは、やはりかつての子どもと比べて大変違うわけです。ですから、そこで子どもたちに対して行わなければいけない生徒指導が内容的にとっても変わりました。かつての子どもたちは大体徒党を組んで何かして、指導しなきゃならないなどという場面が比較的多かったのですが、今の子どもたちは、いじめの問題もそうですが、子どもたちの抱える課題を解決させるために、1人1人丁寧な指導が必要となってきたということ、結果的にここの時間がかなり膨らんでいると思います。

それから、内訳の中で、やはり事務的な処理が極めてふえています。これは、教育施策に何か改善策をお考えいただく前の段階として、さまざまな調査がなされることがよくありますが、こういったものの対応が事務的な処理の中には多いと考えます。

それから、保護者の対応。かつては、それこそ昭和の時代は、子どものことは学校に、先生にお任せしますからという保護者が多かった中で、現在は比較的、うちの教育方針があって、学校ではどういう指導をしているんですか、してくれるんですかというような保護者もいらっしゃるし、先ほど浅田審議官がぼろっと本音としておっしゃった、子どもをうちに帰したくないという、家庭の教育力の低下ということからも、保護者に対する対応の時間はとても伸びていると思います。

もちろん、それ以外にももろもろありますが、今言った増えてしまった業務の中で教員がどういうことを負担に感じているのかというと、本来、教員は子どもにかかわりたくて教員になっていますから、生徒指導そのものに大きな負担というよりは、指導の内容について直感的に理解できなかったり、あるいは事前に自分が何か調べておかなければ指導ができないというところにやはり負担を感じている。そして、現場の先生からお話を伺うと、これは副校長先生たちも含めてですが、事務作業、事務処理がやはり負担だという声はたくさん聞きます。ですので、できるだけ子どもに向き合う時間を生み出す。その中には、間接的によりよい授業をするための教材研究をはじめとした研修の時間ももっと取りたいと思っている教員が多いというのが現状かと私は考えています。

○保坂区長 今お話を伺っていて、世田谷区では学校の建て方を少し工夫して、例えば仮

設校舎は3億円、4億円と結構お金がかかります。こういったものをつくらなくて、中学校の校舎に小学生が通ってもらうような形で工期を圧縮して、少しお金をつくる。また、現在、深沢中学でやっておりますけれども、全部壊さないでリノベーションすることによって財源を得るといようなことで、ICT教材、タブレット端末、無線LAN、こういったものを昨年は小学校全校に、ことしは中学校全校に普及させていますが、これはまた別の側面から考えれば、新たに仕事がふえたということにもなっているのかとちょっと心が痛い気がしたんですけれども、先生方がその新しいツールを使いこなしながら、子どもたちにとっては新しい時代に当然必要な機材であり、紙の教科書になかった特性を持っているのですばらしいんですが、それは果たして先生個人の努力だけに求めているいいんだろうかということを感じています。

次に、井上委員に伺いたいんですが、井上委員は、地域の学校運営にもかかわった経験もあり、地域から多才な人材をどう支えるのかという側面からと、もう1つは、現在、東京都市大学で教えておられて、学校現場で困った状態になったときに、大学の学生さんの力も含めてサポートに行くということも取り組まれていると聞いています。教員支援、学校支援というところでお話しいただけたらと思います。

○井上委員 私は、今の教育の大きなトレンドの1つに、個人で何とかするということから、先ほどの浅田審議官の話にもありましたけれども、「チーム学校」と言われるような、チームとして、あるいは教育のシステムとして、いろんな問題を解決していくように変わって来ていることがあると思っております。

先日、「インクルーシブ教育システム」、いわゆる特別支援の推進にかかわるテーマの研究報告書を読んでいたら、これからの普通学級の担任の先生に求められる資質・能力として、1人で抱えない、支援を求めることができる、つまり、同僚との協働が大事だと書かれてありました。先生として一人前になるということは、自分ひとりでできるようになることだと思っていたのですが、これを読むと、ひとりでするだけではなくて、必要ならば誰かの力も借りて、大きな視野から物事を複合的に考えていくこと、そして、子どもと一緒に先生も、私たち大人も成長していくことがこれからの新しい時代には必要なんだと感じました。

多忙な学校に対してどのような支援をしていくのかという問題についても、そういう視点を踏まえて考えなければいけないのではないかと。区長のご質問に対するお答えになるかわかりませんが、私は2つのことが大事ではないかと思っています。

1つは、ビジョンを共有することです。世田谷には各界で活躍されている方が暮らしており、また、学生も多い。そういった方たちが学校に力をかしてくださると学校は本当に助かるのですけれども、ただ助けてもらうというだけで本当にいいのか。少し前に、コミュニティ・スクールという制度ができ、私も幾つかのコミュニティ・スクールに10年ぐらいかかわってきましたが、地域住民や保護者のみなさんに、今までやってきたことと一体何が違うのか、地域が学校を支援することで何が変わるのかをなかなか理解していただけなかった。

そんな中で、ある保護者の言葉に、「なるほど。そうだね。」と皆さんが納得したのですが、それは、「みんなの子どもをみんなで育てる。」という言葉でした。「みんなの子どもをみんなで育てる。」　そういう思いで、みんなで、学校を支援していくということなんだねと。

別の学校の例ですが、交通量の多い道路に面した地域で自転車屋さんを営まれているある保護者が「横断歩道でないところで道路を渡ろうとする子どもたちが気になってしょうがない。自分が自転車屋ということもあるけれども、とにかく、ここで交通事故を起こしたくない。だから、そういう子どもを見かけたら、容赦なく大きな声で叱りつけるんだ」と話してくれました。昔は近所におっかないおじさんがいて、悪さをしたら叱られたものですが、コミュニティの学校をつくるということはそういうことなのかもしれません。そんな発想から、今年の夏休みに「サマースクール」のプログラムとして、プロのスタントマンが車にぶつかって事故を再現するというのを企画、実施したそうです。こうした企画は、先生だけではなかなかできないと思うのですが、地域にはいろんなアイデアを持った方がいらっしゃる。ただ単にボランティアとしてうまく活用しようということではなく、学校の先生や保護者の方や地域の人たちが、先ほどの浅田さんのご講演にもあったように20年後、30年後をイメージしながら、どんな子どもに育ててほしいのか、地域でどんなことができるだろうかと、思いや願いを語り合い、大きなビジョンというか、夢を共有しながら学校を支援していくことが大事です。

もう1つは、活動の担い手をどうつくっていくか、に関してです。世田谷区はいろんな活動を先進的にしている地域でありまして、だからかもしれませんが、もう長くやってきて、ちょっと息切れしているということもあるように感じます。第1部で小松先生もお話されていましたが、「学校支援コーディネーター」というのが制度としてはあるので、それをどのように活用していくのか。特に大事なものは、後継者をどう育成していくかです。ある

時期に一所懸命やってすばらしい成果をあげると、次の人たちにとっては、それがスタートラインになります。さらにそれをよいものにしないといけないと思うとなかなか大変です。そうした意味で、学校支援コーディネーターをどうコーディネートしていくのか。地域と学校をどんなふうにつなげていくか。いわばリエゾン、触媒のような働きや機能が求められていて、それを新しい教育センター構想においても、視野に入れていくことが必要なのではないかと思っています。

世田谷区ではさまざまな先進的な活動がなされていますが、全国的な視野でみたときと、世田谷区のなかで感じることは違いがあります。世田谷区には小・中学校あわせて100校近くありますので、一口に世田谷といっても大変広く、いろんな地域、学校があります。個々の学校からすれば、知りたいのは世田谷全体の話だけでなく、私たちの地域、私たちの学校をどうしていったらいいのか、それを地域住民や保護者が先生方と一緒に考えていくことが大事になります。世田谷区は全体的に見れば経済的にも文化的にも豊かですが、それだからこそ、見えにくい問題もあるように感じます。そういったことを新しい教育センターではしっかりと研究するとともに、地域の方や保護者、そして、大学や学生も一緒になって学校を支えていくことができたらいいいのではないかと考えています。

○保坂区長 ありがとうございます。井上委員からは、1人で抱えないことが資質の1つじゃないかという、ある意味では、やっぱり20年前にはなかった言葉かなと思います。本校にはいじめはありませんといずれの学校でも言っていた時期があって、いじめがあるということ自体が恥ずかしいことで、それ自身が管理能力がないというマイナス評価を回避するためにいじめはないことになり、逆に言えば、いじめという現実があったときに、それをなかなか直視できないということにつながっていた。そういうことから見れば、いじめはあり得るし、いじめはどの学校にも起きているんだけど、それを悪くしないためのブレーキや介入や改善が必要だということだろうと思います。

教員の多忙化について榑原委員からお話いただきましたけれども、「セブンイレブン」という言葉があるらしいです。7時に家を出て、11時に家に帰ってくるということで、アンケートだけではなくて、そういった処理作業がかなり多くて疲弊しているというんですか、多分先生自身が本を読んだり、映画を見て感動したり、時には休みを使って旅をしたり、あるいは友達、異分野の人と話していろいろ着想を得たり、呼吸で言えば息を吸う時間が少なくて、吐いてばかりいるので酸素不足になるということがあるのかなと思いますけれども、そういったところをどういうふうに支えていけばいいのか。その事務処理に



加わって、親からかなり難しい要望があって、それは毎日電話対応をしなければいけないとか、クラスの中でなかなか着席してくれない子が複数出てきたときにどうしたらいいのか。今の現状を少しかいつまんで、もう1度、榊原委員にお聞きします。

○榊原委員 今のお話の中で、どういうふうにしたらいいんだということの1つで私が思ったことは、先ほどの2013年のOECDの国際教員指導環境調査の比較の中で、日本は学校の80%以上が教員で占めているんです。例えば、イギリスあたりは教員の割合が約半分です。では、あとの半分ぐらいはどういう人がいるのかということですが、看護師さんであったり、もちろんスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、司書といったようなそれぞれの専門職が、基本的に非常勤よりは常勤で配置されている。ここがやはり大事なかなと思うんです。井上委員のお話にあった1人で抱え込まないということからも、すぐそばに力になってくれそうな人がいれば声をかけやすいということがあるかと思えます。ですから、チーム学校というのを形だけではなくて、本当に名実ともにチームで子どもたちを育てていけるような学校にしていくようになるといいと思います。

○保坂区長 ありがとうございます。

それでは、堀教育長に伺いたいんですが、昨年「みんなの学校」という映画では、障害を持つ子どもたちが大変多い学校でこれをサポートしながら、いわゆる障害を持つ、配慮を必要とした子どもに対するケアを主な仕事とする人たちも駆け回っていました。今、学校の中に、多様な学校支援コーディネーターも含めて包括支援員を入れようとしています。2番目の話題にも少しつながっていくかもしれませんが、学校の中でできるだけ多様な力を、教員だけに背負わすということから転換していく道はないのかということと、もう1つ、今度は学校の外側から、新教育センターにつながる話ですけれども、やはりサポートに行くという仕組みを早くつくるといいなと私は思っているんです。

新教育センターができるのはもう少し先になります。ただ、今、世田谷の学校が抱えている困難というのは恐らくあると思います。困難があったときに素早くスペシャルな人材がサポートに行く。これはある意味で1つの地域、1つの学校単位を超えて、それこそ区全体で学校を支えていこうという体制につながると思うんです。そういう意識がきちっとできてこそ新教育センターは意味が出てくると思うんですが、学校の中の多様な人材と、学校の外側からの支援、この2点についてお聞きします。

○堀教育長 きょうは3時間弱でお話をいただいておりますが、澁澤委員長の話、浅田審議官の話、点検・評価の学識経験の方の話をお伺いして、今の区長に対するお答えに

なるかと思うんですが、学校だけではないということがきょうのキーワードかと思ってお聞きしていました。学校は、もちろん校長、副校長、教員は頑張っております。ただ、その頑張り以上に、社会、子どもたち、家庭の変容のスピードと合わなくなってきているということをこの数年すごく痛感しております。オランダ、昨年度はフィンランドに行かせていただきましたし、そういう点からしますと、もう学校だけではないんですね。学校を中心に関係者、先ほどの学校関係者ということもありましたが、多くの方々が1人1人の子どもに対して手厚く対応しているということを実感してまいりました。

先ほど区長からお話がありましたが、いろんな点で、特に学校包括支援員は、教育ビジョンの中では3年か4年、もっとかけて毎年数名ずつ、1校1人という形で進めてまいりましたが、海外の研修等を踏まえて、区長から前倒しでやろうとお話いただきまして、特別支援教育の充実も踏まえて、今年度から全校に学校包括支援員を配置していただきました。2年前からは、教育支援チームということで弁護士の方、スクールソーシャルワーカー、ことしから精神科医の方にもお入りいただきまして、学校、子どもたちのさまざまな課題を解決していこうというチームも組ませていただきました。

ずっと前、「ER緊急救命室」というテレビ番組がありまして、とてもおもしろく見ておりました。あの時代に、既に救急救命室はお医者さんと看護師さんだけではなく、いろんな方々が1人の人間の命を救うという体制を整えておりました。今、私たちはそういう時代を迎えてきているのかと思っております。

ただ、チーム学校と言われたときに、管理職だけが多忙になっても困るんですね。校長、副校長だけではなく、いろんな方々が入っていただいて、その方々の責任で解決してもらう体制をつくっていただかないと、ますます学校は多忙になると思っております。

それと、浅田審議官がおっしゃっていましたが、本当に子育てが大変難しい時代になってきておまして、家庭教育がとても重要な時代になってきたと思っております。家庭に帰したくない、学校も私たちもそういう思いを持つことも多くなりました。非常に入りにくい分野です。それに対してどうしていくかというのは新教育センターで幼児教育を掲げておりますが、あの分野が学校外から入ってくる考え方になるかと今思っております。

○保坂区長 それでは、次のテーマにも行きながら、最後に総論でまた皆さんから御意見をいただきたいと思いますが、「幼児教育において、何が必要か」、言葉としては非常に幅広いんですが、これは永井委員にお話しいただきたいと思っておりますけれども、先ほど外遊びの話をしました。休み時間は学校の外でも中でも遊んだりしますけれども、主に学

校の外でいろんなことに挑戦したり、ぶつかり合ったり、けんかしたり仲直りしたり、子どもたちが子どもたちだけの時間を持って泣いたり笑ったり、うれしかったり悲しかったりという時間があるわけです。時間があるわけですがと言いましたけれども、実は、その話を聞いて、「昔はそうだったんだね」と言う今の子どもがいるんです。子どもの多忙化なんですよね。

20年ほど前に、私がジャーナリスト時代に、何とか子どもを外で遊ばせようということで、先生が子どもたちの塾、習い事の予定を全部後ろに張り出して、「お約束タイム」と言うと、みんな行って、「おまえ、あいているか」と言って遊ばせるという取り組みをしていたということを聞いていたんですが、今やそこもまた難しいのかなど。個人情報だという話になっちゃうかもしれません。そういったあたりで子どもたちの生きる力、柔軟な感性をどうやって培っていったらいいのか、そういった遊びとか何かということについて、保護者の方は比較的、「また遊んでばかりいて、勉強しなさい」と言ってきたほうだと思うんですが、今は結構見直されていることに関して御意見などがありましたらお願いいたします。

○永井委員 多分外遊びとなると、公園だったり遊ぶ場所がなかなかという話になると思いますし、また、ちょっと時間がなかったり、幼稚園の場合は親がついていたりということにもなって、親に時間がないということもあると思うんですけれども、幼児期の育ちで言うと、学童期以降の社会性や知的機能、情緒など、心身の成長の土台にもなりますので、日常の遊び、また生活の中でもさまざまな場面でそういった経験をさせながら、十分に伸ばして育てていきたいと考える保護者も多いと思うんです。ただ、環境というところで言うと、なかなか外で遊ばず機会がないというふうになるんじゃないかと思います。

先ほど保坂区長が外遊びは絶滅危惧種だという話をしていましたけれども、家庭ではなかなかできないことでも、私の家の近くに保育園の分園がありまして、園庭は整備されていなくて、狭くて、黒土が舗装されていないようなところが子どもの遊び場みたいになっていて、雨が降るとすごく大きな水たまりができて、悪条件な園庭だなと大人は思ってしまうんですけれども、どうやら子どもたちは、その水たまりがとてもいい遊びの道具になっているようです。そこの保育園の先生方も、園内での生活というのは私たち地域の者には見えないですけれども、外遊びは買い物に行く途中とか、歩道のすぐ脇にその広場がありますので様子をうかがうことができるんですけれども、時間の許す限り同じ遊びをするのではなくて、子ども1人1人が興味や関心を持った遊びを自由にさせているような感じ

があります。数人で穴を掘って、その穴を掘ったところに水がざあっと流れるのを楽しんでずっとやってみたり、1人で園庭の隅のところずっと何か観察しているような感じがあって、何をしているのかなと思ってたまに見ると、ダンゴムシをずっと見ていたりとか、子どもはなぜかダンゴムシが好きですよね。そういった自然の中の生き物を見つけて観察する子どももいたりとか、そうしているうちにけんかが始まるわけです。やっぱりまだ3歳、4歳の子どもですから、自分で考えたり思っていることを言葉で表現することができなくて、たたいてしまうんです。そうすると、たたかれたほうは、痛いから泣くわけです。たたいたほうも、やっぱり自分も何か悪いことしたんだなと思って一緒になって泣くんですね。先生は、泣いた時点でとめるのではなくて、少し落ちついたところで声をかけて、ある程度2人のやりとりを聞いて、何が原因だったのか、どうすれば仲直りができるのかをその子どもたちに考えさせるということをやっているようです。

幼稚園や保育園に通っている幼児期というのは、机に向かって勉強するのではなくて、やっぱり遊びの中で本当にいろんなことが、子どもは小さいですけれども、小さいなりに社会を築いて、その中で遊んでいるんだなと感じました。それを家庭でやれとなるとなかなか難しいですけれども、児童館だったり、地域で子育て支援グループとかがありますので、そういうところを利用してさまざまな体験をさせることも幼児期には重要なことかと感じます。

○保坂区長 今回の永井委員のお話ですが、子どもは泥遊びが好きで、水たまりがちょうどよくて、ダンゴムシなんかをいたらずっと見ていて、つついてみたりとか、いろいろ観察しているということで、けんかもあって、仲直りもあってというとてもいい話だと思います。

さて、澁澤委員長にお聞きしたいんですが、澁澤委員長は、日本中の限界集落に年がら年中あちこちに出かけられて、そういった山村、中山間地の人口が少ない、まして子どもも少ない中で、自然にはとても恵まれていると思うんですけれども、伝え聞くところによると、自然に親しんで遊ぶことがむしろなくなっているとも聞いているんです。世田谷区の子どもたちは、世田谷だけにこもっていないで、交流都市も40カ所ありますから、川で海で山でいろんな体験を積んでほしいと思いますけれども、幼児期の非常にかげがえのない時間、非常に大きな心の基盤を形成する時期、これは割と親の考え方によっていろんな環境になります。ある子は英語塾の次はスイミングとずっと並んで、4歳でも多忙だという子もいますし、ある子は遊びの中で生き生きと育っているということもある。一概に早

くからいろんな稽古事をするを否定するわけではないんですけども、こういった子どもたちの直接体験、そして自己形成ということと、世界中で幼児教育、就学前のプレ教育というのにすごくスポットが当たってしまっていて、それは必ずしもいろんな知識を教えることだけではなくて、いろんな工夫があるんだろうと思います。そのあたりについて御発言いただけますでしょうか。

○澁澤委員長 実は私、これから愛知県の山の中の廃校になった小学校と、それから廃校になろうとしている小学校をどう維持するかということで向かうのですが、私の場合は、日々ほとんどがそういう社会での仕事ですから、一方で、世田谷区という子どもの数も非常にふえているし、それから経済的にも、あるいは施策的にも非常に恵まれた環境の中で暮らしている子どもたちとを絶えず対比しながら、また、周辺にあるコミュニティーがどうなのかというのを対比しながらずっと見させていただいています。

私が1つ印象に残ったのは、ただいま保坂区長がおっしゃった例えば英語とかの習い事で知識とか技能をその子にどう効率的にたくさん持たせるかということが、実はその子どものスキルアップや幸せにつながるのだと、多くの人たちは考えています。それは、多分この50年の日本人の感覚で、その前の日本人というのは大分違ったのだろうと痛切に感じます。この50年は、経済性や効率性や合理性というのが全てに優先されてきました。ですから、永井委員がおっしゃっていた子どもと子どものかかわりだとか、あるいは自然と人間とのかかわりだとか、世代間とのかかわりというのは、これは貨幣で翻訳できませんから基本的には価値のないもので、もっと言ってしまえば煩わしいものとして、その関係性を合理的に捨ててきたのだと私なんかの世代はとても感じます。

それを一番感じさせられたのは、今、子どもは言語というもので物を考えるのが当たり前になっているのですが、言語と、今おっしゃった非認知能力というか、体験とのすき間の部分というのはとても重要な部分で、私が今からもう20年ぐらい前に、仲間とアイヌ文化の継承記録の仕事をしていたときがありました。そのときに偶然、平取町の二風谷という集落でサケがたくさんとれたときがあって、サケがたくさんとれて大漁というのはアイヌ語で何て言うのですかと言ったら、萱野茂さんというリーダーが「ア・エラ・ウナ・ル」と言われたのです。それはどういう意味ですかと言ったら、「私・それを・隣に・届ける」という意味なのです。私たちは、今の日本語で教育を受けてきますと、大漁というのは自分の所有物がたくさんふえたという喜びなのですが、アイヌの人たちの大漁というのは、分配することができる、要するに共有するものがふえた喜びなのです。つまり、

言語で私たちは話していますけれども、実はその言語の下にある体験というのが、基本的にはその人間たちの物の考え方、あるいは、非認知能力が認知能力のある意味でのベース部分をつくっているということをアイヌの集落で強く感じて、その関係性の中に、まさに自分たちがどうやって存在するのかということが全部多分あるのだろうなと思っています。

人と人との関係でも、今のソーシャルネットワークでやっている関係性は、もう本当に絶えずLINEでつながっている。だから、あの子と私はとてもつながっているから大丈夫なんですという話を子どもたちはするのだけれども、例えばLINEで「おはようございます」と打つと、それはビット数で言うと8ビットなんです。ところが、顔を合わせて2秒間「おはようございます」と言うと、そこでの情報の交換量は7300万ビットぐらいあるのです。つまり、フェース・ツー・フェースというのは物すごく多量の情報を瞬時にやりとりするから、基本的には煩わしくなって捨ててきて、ソーシャルネットワークに入ってきた。ですから、ITもICTもソーシャルネットワークも基本的には情報量が非常に多くなっているように見えるのですが、それは広がっているだけであって、決して多くの情報量をやりとりしないツールなのだとすることを念頭に私たちは持っていなきゃいけない。やっぱり最も多量の情報の交換というのはフェース・ツー・フェース。だから、やはり学校教育というのは、私は意味があると思うし、コミュニティーも意味がある。その人と人とのつながりというのは非常に煩わしく、つらいものだけれども、自分の存在に価値があるのだということをもう1回価値づけていく時代だと思うのです。

先ほどから学校の支援という形でお話が出ていて、それはそうだなと思っていたのは、多くの人たちが学校にかかわる。榊原委員は常勤でとおっしゃいましたけれども、僕は常勤でなくてもいいと思っています、要するに、かつての日本はこんなサラリーマン社会じゃありませんでしたから、みんないろんな仕事を持っていたのです。私が仕事をしていたオランダでも、オランダの外務省の人間は、みんな大体4つか5つのNPOに入って当たり前でした。みんなそうやっていろんな社会での役割を多様にこなしながら多業が多様な世界を支えていくという、ある意味で、建築で言うと総持ちみたいな、全員で1つの社会をもたせていく。1つ1つの個々の強さではなくて、全体の強さで建物を支えるという感覚の社会をどうつくっていけるかということが、この関係性の重要性、特に幼児教育の中では一番重要なことかなと思っています。

○保坂区長 今のお話を伺っていて、大漁というアイヌ語が「私、それを隣に届ける」と

という意味だったというのはすばらしいと思います。

たしかオランダで教育の話、デンマークでもそんな話を聞いたんですが、幸せとは何かということを行うときに、みんなが笑顔になることだという、そこが到達点の社会になっていて、みんなでシェアしていくというのと、自分が1番になることだ、自分がスーパーヒーローになることだ、大金持ちになることだというアメリカ型の勝ち抜きイズムとでは、日本はどちらかというと前者にいた社会が、この50年で1位を目指せということで変容してきた。だけれども、全部が変容しているわけではなくて、本当に過渡期なんだろうと思います。

もう1点、澁澤委員長にお聞きしたいんですが、幼児教育の中で学習の早期化ということも出てきます。それと、体を動かしたり、お互いがぶつかったり、冒険をしたり、ちょっと怖い思いをしたりという直接体験の中で体が自然と触れ合い、ぴりっとなって、やはり意欲というんですか、何かやってみよう、何かできるんじゃないか、失敗したけれども、ではこっちから回ってみようみたいなところが、今の日本の若者あるいは日本社会の企業自体も結構悩んでいるところです。あるいは若い先生の問題かもしれない。その意欲というのはどこから形成されるのかというあたりをお願いします。

○澁澤委員長 学習と体験は両極な話では全くないと思っているのです。私は、環境NPOですから、よく子どもたちを自然の中に連れていったりするのですが、環境教育というのは、どうしてもこの木は何という名前です、この草は何という名前ですという、要するに自然の謎解きみたいなこととか、絵解きで終わってしまうのです。それを学習に結びつけさせるには、それを自分の中で反すうさせないと、子どもは絶対達成感を持ち得ない。先ほど工藤先生のお話にも出てまいりましたけれども、例えばこのドリルができたのだとか、あるいはこれがわかったんだという達成感がとても重要ということで、自然の中で体験させたものをどう達成感に変えてやるかというのは、ある意味では横から支えるとか、サポートするシステムというのはどうしても必要だろうと思います。それが確実に学習に結びついていくと思いますし、その辺の体験と学習の間の部分というのは、先ほどの社会の中でも同じなのですけれども、コーディネーターや教員の役目です。そのコーディネーターだとかコーディネートということを——実は、私はそのことを仕事にしているのですけれども、本当にお金にならないんです。日本社会はコーディネートをすることに余り価値をおいてこなかった。やはりその辺をもう1回、間をつなげていくということ、世田谷区ではちゃんと価値として認めていくようなシステムができればいいなと思っ

ています。

○保坂区長 ありがとうございます。残り時間が少なくなってきたので、一言言っておきたいという方、井上委員、どうですか。

○井上委員 学校教育を「学校内に閉じずに」という話が出ていましたが、そのためにも、学校は出会いの場になることが重要ですね。学校は地域にあり、先生も地域にいますけれども、本当の意味では出会っていないんじゃないか。子どもたちも、地域の人を目にしているけれど、見ているだけで出会ってはいないんじゃないか。先ほどの澁澤委員長の話にもありましたけれども、学校は、そうした「真の出会い」をコーディネートするような仕組みづくりにはまだ成功していないのではないかと。そのあたりをどんなふうに行っていくのか。これは非常に知的な作業であり、「学力」とも大いに関係すると思うのですが、それを今、みんなで考えていかないと、盛んに言われているアクティブラーニングには踏み込んでいけないような気がしております。

世田谷にはいろんな大学があり、学生たちもたくさんいます。今の学生は、学校はもちろん、例えば、商店街などにもチャンスがあればかわりたいたいと思っはいるようすが、考えているだけでは先に進みません。実際に地域の中でいろんな活動をしなが、さまざまな年齢やバックグラウンドの人と出会うことが必要です。そうした出会いによる学びをうまくつくっていくことが求められていると、日々、自分の講義の中でも感じています。

○保坂区長 では、そろそろまとめさせていただきます。

この総合教育会議では、前半の教育推進会議の御講演とシンポジウムを受けて、また少し風呂敷を広げさせていただいて、人が学ぶとは何か、意欲を持つというのはどういうことか、幼児教育というのはどうあるべきか、学校現場で先生が1人背負い込む、抱え込むということから、どういうふうにお互いの助けを自然な形でかりるか、また、学校の中に多様な人材が入って、子どもたちにとってもさまざまな角度からのサポートが入ってくる、そして子どもたち自身も学校の中でいろいろ惹起している問題について解決の主体になっていくことも、これからの学校において多分必要なんだろうと思ひました。

また、新教育センターについては、私たちはオランダで見えてきて、そこにあったすばらしい種類の世界中の各教科の教材の多彩さに目をみはりましたし、また、その中で、とりわけシチズンシップ教育、いわゆる市民教育といひましようか、有権者教育、納税者教育に対してワークショップを組み合わせなが、子どもたちが社会というものを理解していく。



世田谷の18歳が何と7割の投票率だったということが一時現象にならないように願いたいですが、今本当に大きな変わり目で、これからの時代、子どもたちがどんな力が必要なのか。正直言って、私たちはこれだと描いて20年後を見せてあげることにはできないかもしれませんが、そういった非定型な、ある種不透明な、予測不可能な事態に対して、やはり自己肯定基盤がしっかりしていて、柔軟な発想力とさまざまな課題の組みかえができる、それがいわゆるペーパーテストや机の上の学習だけではなくて、むしろ遊びとか冒険とか、世田谷はそういった取り組みやグループも随分ありますから、そういうものがヒントになりながら学校での学び、地域での子ども支援、教育の新しい展開につなげていけたらと思いました。

まだきょうは話の途上ですので、次に11月に、さらにこのお話を展開させて、世田谷区の幼児教育、新教育センター、ちょっときょうはお話に出ませんでしたけれども、特別支援教育のさらなる1人1人の子どもに着目した支援も必須の課題になっています。そういったところについてきょうは議論させていただきました。最後までおつき合いただいた皆様に感謝をいたします。

では、審議官、せっかく最後までおつき合いただいたので、感想を一言。

○浅田審議官 総合教育会議を最初から最後まで見せていただいたのはきょうが初めてかもしれません。私としても大変ありがたい機会でした。ありがとうございました。

さっきからお話が出ていますが、私が校長をやっていた時にも強く感じたのは、学校教育を豊かにする上で、学校の周り、地域には、学校から見て使える教育資源、人や団体や文化や歴史などいろんなものが豊かにあるということです。それを学校教育のため、子どもたちのためにどういうふうによく使っていかうかが、学校にとっても大きな課題だし、校長にとっても腕の見せどころではないかと思います。

学校を社会に対して開いていくために、また学校と社会との連携を深めていく上で、これからの教職員にはつなげる力やつながる力、そういったものが今までよりずっと大事になります。これは校長だけではなく、全ての教職員に、さらに言えば地域の方々にも持ってもらいたいものです。学校の立場から言えば、教育行政にはそういうところも応援していただけるといいなと思っています。きょうはどうもありがとうございました。

○保坂区長 ありがとうございました。ぜひ浅田審議官には文部科学省の最前線で制度設計をすると同時に、世田谷区民としても世田谷区の教育を応援していただけたらと思います。

では、司会に戻します。ありがとうございました。（拍手）

○司会 保坂区長、教育委員会の皆様、ありがとうございました。

出演者の皆様が退場されますので、いま一度大きな拍手でお見送りください。（拍手）

最後に、事務局より、いま一度アンケートの御協力についてお願い申し上げます。

配付資料の中にピンク色のアンケート用紙がございますので、お帰りの際にアンケートに御協力くださいますようお願いいたします。アンケート用紙は出口で回収いたします。

以上をもちまして、世田谷区総合教育会議及び世田谷教育推進会議を終了いたします。本日は御来場ありがとうございました。

午後 3 時53分閉会